



## 海外神社跡地から見た景観の持続と変容 台湾中部の海外神社跡地を訪ねて

中島 三千男  
(非文字資料研究センター 研究員)

2013年5月30日(木)～6月3日(月)、台湾中部の海外神社跡地10社の調査を行った。日程等の都合で訪れた、台湾北部・基隆地域の2社を含めて、併せて12社の報告を行う。

同行者は森武磨大学院歴史民俗資料学研究科教授、通訳の台湾師範大学大学院生安井大輔氏、それに車の運転をお願いした頼俊良氏の3人である。

調査結果は表1の如くであるが、以下、表中の順番ごとに簡単に状況を報告する。尚、写真は紙数の関係から、一般に知られていない4枚に限定した。

### [台中神社]

台中神社は1911年創立、翌年10月に旧台中公園に鎮座。1913年県社に列格、さらに1942年国幣小社に昇格した。県社から国幣小社に昇格するにあたり、社地を移転している。したがって県社までの時代を第1代台中神社、国幣小社時代を第2代台中神社と表す。

第1代台中神社は現台中公園の北門楼北方に建てられた。第2代台中神社は旧台中市新高町41番地水源地公園(現、台中市力行路260号忠烈祠)に建てられた。この時、第1代の木造建築(社殿)は取り壊されている。

台中公園内にある、第1代目の神社跡地には、短い参道の両側に17基の燈籠(上部欠け)が残る。小階段を上がると、拝殿基壇前には1対の神馬と狛犬がある。玉垣に囲まれた、本殿基壇部分には孔子像(1973年設置)が立つ。また、参道からやや離れて、石造鳥居(1921年建立)が横倒しにされて保存されており(2000年に整備)、傍には神社の歴史、及びその鳥居の説明を書いた看板が設置されている。

第2代目の神社跡地は現在、忠烈祠等が建てられている。忠烈祠は1972年まで第2代の旧社殿を利用して設けられていたが、1972年の日中国交回復に伴う、日本と台湾の中華民国政府との断交を契機に旧社殿は全て

取り壊され(1974年2月台湾内政部通達「清除台湾日抛時代表現日本帝国主義優越感之殖民統治記念遺跡」、新しく建て替えられた。今日、神社遺物は全く見ることが出来ない。

### [彰化神社]

彰化神社は1927年に社として鎮座、翌年に神社に昇格、1937年郷社に列格された。彰化市の中心街、彰化駅の東側、八卦山の中腹に建立された。この山は日清戦争後の日本の台湾領有時、日本軍と独立を求める台湾側との間に激しい戦闘が行われた場所で、麓には「1895年八卦山抗日保台史蹟館」が建てられている。

社殿跡地には現在大極亭が建てられており、遺跡としてはそこに至る階段が残されているぐらいである。市街から登る参道部分は現在八卦山文化歩道として整備されている。

### [能高神社]、[能高社]

神社が所在する埔里は3000m級の山々に囲まれた盆地で、標高380m～700mの丘陵にある。もともと、この地はブヌン族などの原住民が住んでいるところであったが、清朝時代以降に大量の漢人が入植して漢人の支配する街となった。能高神社は1927年、能高社として埔里街の虎仔山(556m)山頂に鎮座。1938年神社に昇格。さらに、1940年に紀元2600年記念事業の一環として、参詣に便の良い、虎仔山の麓に移転、1944年に郷社に列格された。一方、従前の能高社は能高神社の末社として残った(『神道史大辞典』吉川弘文館、2004年の巻末付表「台湾の神社」佐藤弘毅編、には能高神社のみ掲載されている)。

能高神社跡地は現在、国立埔里高級工業職業学校の敷地となっており、また能高社の方は虎仔山地理中心点となっている。遺物としては、同地の醒靈寺に能高神社の

燈籠6基と狛犬1対が移設されている。また、それらとは別に獅子1対が収蔵されているが、これはもと清朝時代漢人によってこの街に城（大埔城）が築かれた時、その門の前にあった獅子で、能高社が建立された時に、その本殿前に安置されていたものである。

### 〔霧ヶ岡社〕、〔川中島社祠〕

1930年10月に、日本統治時代後期の最大の原住民の抗日蜂起、霧社事件（第1次）が起きた。また、翌年4月、投降した蜂起者たちの収容所が、日本側に協力した原住民によって襲撃されるという事件も起きた（第2次霧社事件）。このため、蜂起に関連しながらも最終的に生き残った人々は、1931年北港溪中流域の川中島（現仁愛郷清流部落）に強制移住させられた。

霧ヶ岡社はこの事件後の1932年に鎮座したものである。現在この地には徳龍宮という廟が建っている。川中島社祠は1937年に強制移住させられた地に建てられた神社である。現在は跡地に「霧社事件 余生記念碑」が2基の燈籠を前に立っており（写真1）、脇に2階建てコンクリート造りの余生記念館が建つ。

遺跡・遺物としては、霧ヶ岡社の場合は燈籠3基（彩色、内1基は笠・宝珠なし）、燈籠の笠1個、それに階段である（彩色・改変された鳥居は後補のものである）。川中島社祠の場合は遺物はないが、余生記念館を少し下った所の旧防空壕の脇に、この神社の写真を含む説明板（写真2）が立てられている。

### 〔埔里社〕

埔里社は台湾製糖株式会社埔里製糖所の企業内神社（私社）として建てられたものである。したがって『神



写真1 川中島社祠跡に立つ「霧社事件 余生記念碑」



写真2 余生記念館付近に立つ川中島社祠説明板

道史大辞典』には掲載されていない。金子展也氏によれば1926年に神社を建立したが、その後、埔里街に能高社が祀られたために、その遙拝所になったとのことである。

現在は小公園となっており、遺跡・遺物としては社殿基壇、手水鉢や鳥居の礎石らしきものが残されている。

### 〔嘉義神社〕

多くの遺跡・遺物のある嘉義神社の現況については、津田良樹「台湾の神社跡地調査からみた共同研究の今後の展望」（『非文字資料研究』27号）と重複するのでここでは省略する。ただ、一言だけ付け加えておくと、1998年に火事で焼失した社殿（旧忠烈祠）の跡地に建てられた「射日塔」のことである。この建物は高さ62m、阿里山の神木を模した9階建て（地下が忠烈祠）、円筒型の建物であるが、元々この地は早期台湾原住民の祭壇があった所で、原住民勇士の「射日（太陽を射る）伝説」に基づき建てられたという事である。

### 〔ララチ祠〕

私共は当初、阿里山神社跡を調査する予定で『神道史大辞典』に掲載されている現住所、嘉義県阿里山郷来吉村4隣50号を訪れた。来吉村はツォ（鄒）族の集落で、4隣は来吉国民小学校、阿里山郷公署等がある集落の中心部である。祖父が神職であったという現地の人に尋ねると、確かにここに神社があったという事である。場所は小学校の裏手道路に面した山林のあたりで、今は道路に面し最前部に石組（上部は金網が張られている）があるが（写真3）、全く遺跡・遺物は見つからなかった。

しかし、金子氏やその他によれば、阿里山神社はこの



写真3 来吉村4隣50号のララチ祠跡地

地点から遠く離れた、阿里山森林鉄道の沼平駅（阿里山駅）の香林中学校のすぐ傍で、現址には孫文を称える記念碑が立っているという事である。私たちが訪れたのは同辞典に載っているララチ祠のようであり、辞典の阿里山神社の現住所は誤記ということになるが、今後の検討課題である。

### [ 奮起湖神社 ]

この神社は『神道史大辞典』には、掲載されていない。創立年代、祭神等は不明である。

この神社は阿里山森林鉄道の中継駅である奮起湖駅の北側、階段で整備された遊歩道の途中にあり、神社遺跡・

遺物としては、本殿基壇と鳥居及び燈籠の台石が残っている。また、ここには神社の説明板が設置されており、「日治時期為強制殖民地達到皇民化的目標、要求人民必須以日本の風俗習慣、言語等為學習対象、因而在各地建立「神社」、由宗教信仰的手段、改變大家的生活様式、神社大多建在環境優雅、風水良好的場所、奮起湖神社亦是如此、現今、走入霧林間、僅余下基座、鳥居和石燈的底座遺跡、供後人追思遙想。」とある。台湾の神社跡にこれほどはっきりと、皇民化政策との関連で神社について述べた説明板は、筆者としては初めて見るものである。



写真4 奮起湖神社跡地に立つ説明板

表 1

	旧支配地名	神社名	旧鎮座地	現在地	社格	創立年
1	台中州	台中神社	台中州新富町	台中市力行路 260 号忠烈祠	国小	1911
2	同	彰化神社	彰化市南郭	彰化市八卦山里八卦山路 1 之 2 号	郷	鎮 1927
3	同	能高神社	能高郡埔里街	南投県埔里鎮枇杷里中心	無	鎮 1940
4	同	能高社	能高郡埔里街	南投県埔里鎮虎仔山地理中心点	末	鎮 1927
5	同	霧ヶ岡社	新高郡蕃地霧社	南投県仁愛郷霧社德龍宮	祠	鎮 1932
6	同	川中島社祠	新高郡蕃地川中島	南投県仁愛郷互助村清流部落	祠	鎮 1937
7	同	埔里社	能高郡埔里街	南投県埔里鎮公誠路 27 台糖工廠前	遙	鎮 1926
8	台南州	嘉義神社	嘉義市山子頂	嘉義市東川里山仔頂 172 号忠烈祠	国小	鎮 1915
9	同	ララチ祠	嘉義郡蕃地ララチ社	嘉義県阿里山郷来吉村 4 隣 50 号	祠	鎮 1933
10	同	奮起湖神社	嘉義郡蕃地	嘉義郡竹崎郷中和村奮起湖（後山）	無	
11	台北州	基隆神社	基隆市義重町	基隆市中正公園忠烈祠	県	1911
12	同	金瓜石社	基隆郡瑞芳庄九分	新北市瑞芳区金光路 51 番	祠	鎮 1898

※社格欄の「国小」は国幣小社、「県」は県社、「郷」は郷社、「無」は無格社、「祠」は社祠、「遙」は遙拝所、「末」は末社を表す。  
※4、7、10は『神道史大辞典』には記載がない（記載されているのは「規則」に則った神社・社祠であり、個人や企業等によって建てられた「私社」は掲載されていない）。台湾ウィキペディア「台湾神社列表」や金子展也氏の御教示による。

### [基隆神社]

基隆神社は、1911年創立、翌年に鎮座した神社である。当初は日本人居住者によって讚岐金刀比羅神社より、御分霊を勧請し金刀比羅神社として建てられたが、1912年末に基隆神社への改称並びに開拓三神と能久親王それに天照大神を増祀することが決定され、1915年に基隆神社の鎮座式が行われた。1936年3月25日県社に列格。

神社跡地は忠烈祠となっている。遺物としては、最初の階段を上りきった旧「二の鳥居」跡、現在では「二の華標」のたもとに1対の狛犬とこれを囲む玉垣が残っており、また回り参道に2個の燈籠台石が残っている。階段も当時の階段を利用していると思われる。

### [金瓜石社]

金瓜石社は、北東アジアとも言われた金鉱山（後に銅鉱も発見される）に建てられた。1890年代基隆山の南側で金鉱が相次いで発見される。日本政府は東側の金瓜石を田中組（田中長兵衛）に、西側の瑞芳を藤田組（藤田伝三郎）にそれぞれ採掘権を与えた。第1代金瓜石社は1898年、金瓜石山大金瓜岩嶂の東側平地（現、金瓜石地質公園）に、この田中組によって建てられた。その後、1933年にこの鉱山を引き継いだ日本鉱業株式会社

により、第1代神社より1キロ程下がった、金瓜石山の中腹に第2代神社が遷座（同年）された。

私達が訪れた、第2代神社の遺跡・遺物としては、鳥居2基、燈籠8基、旗幟台2基、拝殿基壇と石柱10本（コンクリート造り）、本殿基壇が残っている。また、拝殿跡入り口の左手に、石製の「金瓜石山神社説明板」（1998年、台北県政府）が立てられている。現在「金瓜石神社活化再利用計画」が進行中である。

筆者にとって今回の神社跡地調査は、台湾での5回目の調査であったが、今回も多く神社遺跡を見ることが出来た。また、初めての知見として、奮起湖神社跡地に神社と皇民化政策のことをはっきり述べた説明板を見たこと、また、嘉義神社が原住民の聖地に建てられたということ、さらに戦後の台湾の神社遺跡の残存にとって、1972年の日中国交回復・台湾の中華民国政府との断交が大きく関わっている事等、学ぶことの多い調査であった。

最後に今回の調査にあたり、台湾師範大学の蔡錦堂先生、同大学院生の安井大輔氏、国立台湾海洋大学の安嘉芳先生、国立台北芸術大学の林承緯先生、黃士娟先生、そして研究協力者の金子展也氏には大変お世話になった。厚く御礼申し上げる次第である。

祭神	現況	残存状況
Y、三神	第1代（県社）は台中公園孔子像、第2代（国幣小社）は台中県忠烈祠	第1代の神社跡地には参道の両側に17基の燈籠（全て火袋以上の部分はなし）、石造太鼓橋、1対の狛犬と神馬、拝殿基壇、本殿基壇、横倒しにされた鳥居。第2代は無し
Y、三神	大極亭、八卦山文化歩道、旧参道入り口部分に1895八卦山抗日保台史蹟館	階段、参道
Y、三神	国立埔里高級工業職業学校	醒靈寺に狛犬1対と燈籠6基
Y、三神	虎仔山地理中心点	旧参道
Y、三神	道教の徳龍宮	燈籠3基（全て彩色、内1基は笠・宝珠なし）、燈籠の笠、階段、彩色・改変された鳥居は後補のものである
Y、三神、A	霧社事件余生紀念碑、余生紀念館	少し離れた所に神社の写真を含む説明板
	公園	社殿基壇、手水鉢、鳥居礎石（?）
Y、三神、A	嘉義公園、射日塔（地下が忠烈祠）	斎館、社務所、手水舎、参集所、神輿庫、参道、狛犬1対、燈籠11基、黒松2本
Y、三神、他4神	山林	無
	山林（遊歩道）	本殿基壇、参道階段、鳥居台石、燈籠台石、説明板
Y、三神、A他2神	中正公園、忠烈祠	狛犬1対、玉垣、参道階段、燈籠台石2個
大国主命他2神	世界文化遺産登録運動の一環として「金瓜石神社活化再利用計画」が進行中	第2代の跡地には、鳥居2基、燈籠8基、旗幟台2基、拝殿基壇、拝殿石柱10本、本殿基壇

創立年欄の「鎮」は鎮座年である。祭神欄の「Y」は北白川能久親王、「三神」は開拓三神、「A」は天照皇大神を表す。